



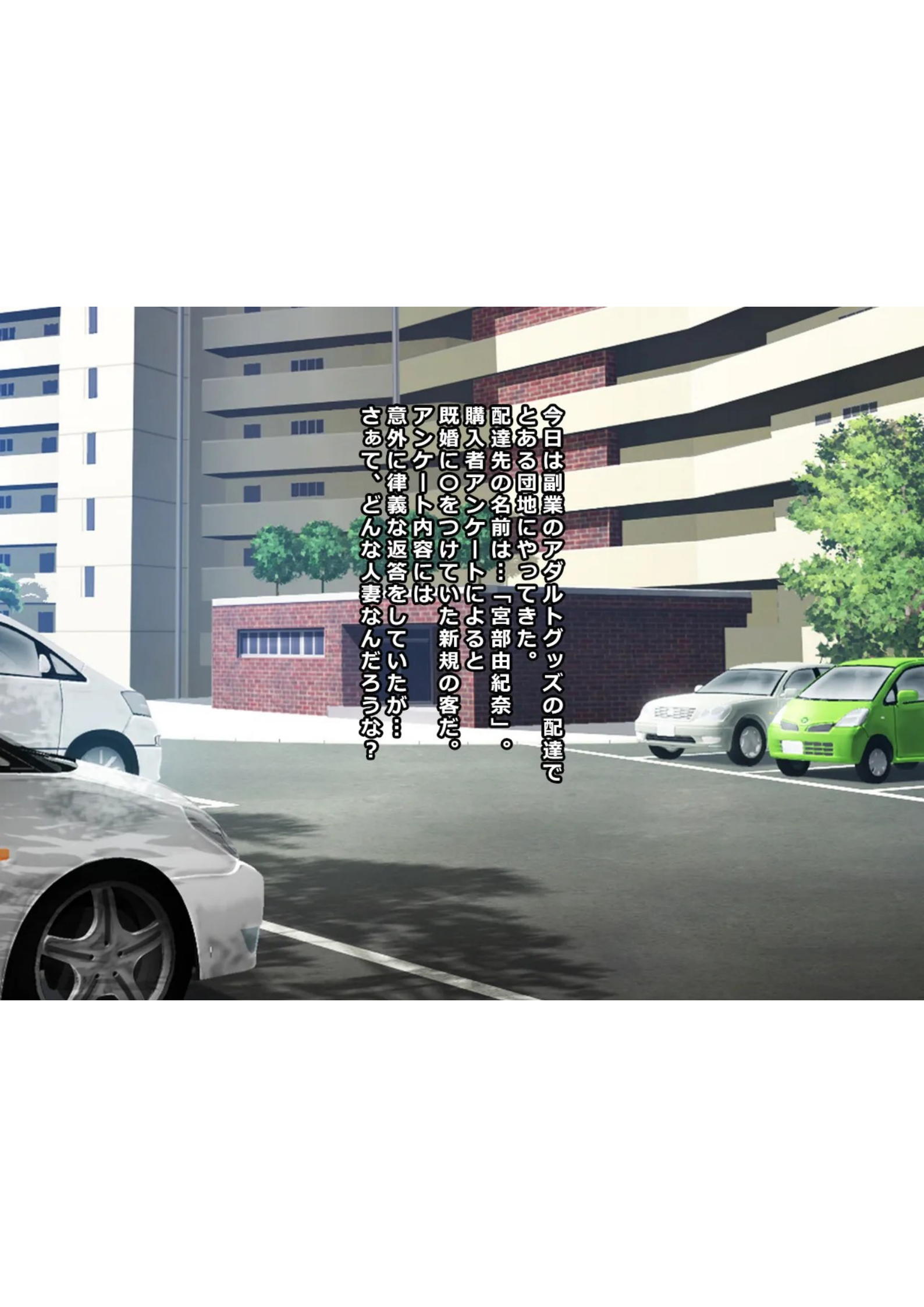
「はあ……」

「全っ然、たいしたこと
なさそうじゃん」

こんがりと日焼けした肌に
切れ長の目……
しかもなぜか刺すような鋭い
視線を投げかけてくる。

ダチのウワサに興味を
もったがゆえに罠に堕ちた

ヤンキー妻 由紀奈 27歳



今日は副業のアダルトグッズの配達で
とある団地にやってきた。
配達先の名前は：「宮部由紀奈」。
購入者アンケートによると
既婚に○をつけていた新規の客だ。
アンケート内容には
意外に律義な返答をしていたが：
さあて、どんな人妻なんだろうな？

年齢、28歳。
女の盛りの匂いがプンプンするぜ。
まあ、過度の期待は禁物だが…
一転、俺好みの人妻だつてこともある。
勿論そんな場合にそなえて
簡単な下準備もしてある。

自作の媚薬香水だ。
ククク…
性能を確かめる
好チャンスになるかどうか
楽しませてもらおうか…。



配達先のドアが開くと、
そこにいたのは
いかにもヤンキー上がり、
といった女。

……はい

宮部由紀奈さん
にお荷物の配達です



はあ、どうも

こんがりと言焼けた肌に
切れ長の目…
しかもなぜか刺すような鋭い視線を
投げかけてくる。

性格はキツそうだが…
顔は悪くない。
むしろ俺好みのこの目つき。
そそるねえ…！
奥までぶっこんだら
どんな顔をするのか？



胸も太もももパツパツで、
弾力もある。
こいつに指を食い込ませたら
どんな感触だろうか…
楽しみだねえ、ククツ。

思わずニヤけそうになるのを
こらえながら箱を手渡す。
勿論中身はアダルトグッズ。
…と。

ええと…?

俺がニヤけすぎたのか？
いや、そんなはずはない、が…
よく見ると、由紀奈も
やけにニヤけた顔で俺を見ている。

ニヤニヤ

どうかしましたか？

由紀奈の意図を計りかね、
そう尋ねると…



あんたが配達先の女と
やりまくってるってウワサの、
トシって奴だろ？

はい？

ハッターが、正気か？

何のことでしょうか

真偽を計りかねて
うそぶくと…

ニヤニヤ

とぼけてもムダなんだよ。
あんたの噂、ダチから聞いて
知ってるんだから

由紀奈はキュッと
眉を吊り上げた。



ダチが、最近色気づいてさ。
話聞いてたら、配達野郎と昼間に
やりまくってるっていうのさ。
最初は聞き流してたんだけどさ
凄く良かったってあんまりいうもんで
ちよつとだけキョーミ沸いてね。
どんな奴なのかって思ったんだけどさあ



けだるげな様子で、しかし一気に
まくしたてる由紀奈。
そのまま俺の頭の先から
爪先まで舐めるように見回すと…

人を小馬鹿にしたように
ニヤつく由紀奈。

マジで拍子抜け

はい？

全っ然、たいしたこと
なさそうじゃん

はあ…？

安い挑発だが：正直、
おもしろくはない。

ニヤニヤ

あ、ちなみに言っとくけど
あたしはあんたなんかと
やるつもりはまったくないんで。
誘おうとしたってムダだから

言いながら鼻で笑う由紀奈。

…上等だ。
そこまで言われて、
おめおめと引き下がる
俺じゃない…。

この女、
絶対にモノにしてやる。
さしずめ、人妻ハッカーの
本領発揮、
とでもいったところか。



深呼吸一つして、
俺はやれやれといった感じで
首をふってみせた。

べつに、誰かれ構わずって
わけじゃないですよ。
そこまでヒマでもないですから。
こちら、良いなと思った方にしか
声はかけませんし

……はあ？

鼻白む由紀奈。

それに奥さんは……まあ、
あまり経験もお持ちでは
なさそうですねえ



あん!?

あゝつと失礼。
口が滑ってつい本音が。
ここに受け取りのサインを
お願いしますよ。
こう見えても忙しいのでね

ちよ、ちよつと待てよ。
ふざけんな!



伝票を押し分け、
由紀奈は顔を真っ赤にして...

なにスカしたこと言ってたんだ?
客に対して、失礼じゃないか!



経験がないとか、
イカサマ言いやがつて…!!

おやおや。
『経験がなさそうだ』と言ったのは
当てずっぽうだったが…
この様子を見ると
あながち間違いでもないようだ。

たいてい、経験がない女の
反論なんてこんなもの…。
この顔で純情キヤラとは、ククッ。

おや、おかしいことを
おっしゃる。
先に俺を侮辱したのは
奥さんの方でしょう？



な、なにを

誰かれ構わず相手にする
奴だとかなんとかか…

だつてそれは、ダチが…!!

ああ、そうでしたね。
あなたのお友達にも、
あんまり俺にのめりこまないでつて
言つておかないといけないですね。



でも少なくとも、
奥さんにはそそれなかつたので
荷物を届けたらすぐに帰つたと
言つておきますね

ん、な……っ!

セックスは『お互い合意』で
楽しむものですからねえ…
お友達とは楽しくやらせて
もらってますけど、
奥さん相手じゃ…ねえ？

言いながら、ハンコを
急がすかのように
伝票をわざと胸元に
つきつけてやる。

くっ、そ、
そこまで言うなら、
あたしと勝負しな！

…しめしめ、かかった。
こみ上げる笑いを
必死で押し殺す。



勝負……ねえ。
なんですか？それ

あ、あたしとやりたいって
アンタに言わせてやる…
そう言っただよ！

ちよるいもんだねえ…。
こういう女は勝負ごと
持ち込めばやすやすと
ひっかかるもの。

あまりにも目論見通りに
事が運びすぎて、
今にも笑い出してしまいそうだ。
俺は必死で回元を引き締める。



なるほど？
それはつまり…どちらが
先に『やりたい』と言うかを、
勝負するってことですね？

そうだって言っただろ！
わかったら、さっさと入んな！



切れ長の目をきりきり吊り上げながら、
由紀奈は俺を部屋へと招き入れた。
いい気なもんだな。すべての筋書きが、
こつちの思惑通りだとも知らないで。

ククク！
さあで、試合開始、っと。

では、お邪魔しますよ

頭から湯気が出そうな
由紀奈の後を追いかけて
俺は家の中へと上がりこんだ。

ここからが
本当のお楽しみだ。



ほらっ、見ろよ！

リビングに着くなり、
服を脱ぎ、下着を
見せつけてくる由紀奈。

どうだ、イイ体してるだろ！
何とも思わないなんて
言わせねえからな

どうだ！と言わん
ばかりの表情だが…

いや…下着姿になつたくらいで
何か…と言われても全く

……えっ？

せめて、おっぱいくらいは
見せてもらわないと

アハッ

えっ…おっぱいって…

先ほどまでの勢いは
どこへやら。
表情が一変する由紀奈。

こ、これ以上…
脱げっというのかよ…？

流石純情派、
照れるのも早いな。

なんだよ、
人妻だつてえのに
おっぱいすらも
見せられねえのか
ん、な…っ！

勝負にすらならないね

やれやれと首を振り、
俺はソファから立ち上がる。

ほら、サインしてくれ。
帰るから

ちよつと待て！
か、勝手に終わらそうと
するんじゃないよ…

いいからいいから。
無理すんなって

う、うるさい！
無理なんかじゃない！
ふざけんな、胸見せるくらい、
どうってことねえんだよ！

言いつつも、
顔を真っ赤に染めた由紀奈が
下着に手をかける。

くそっ…これでいいんだろっ！

由紀奈がブラジャーを脱ぎ捨てると、
たゆんと揺れる大きな胸が姿を現した。
由紀奈のその小さな手では、
豊かな胸の頂しか隠せておらず、
それがかえって劣情を刺激するが…
隠してるなんざ良い度胸だ。

ぽっ

ぽっ

おいおい、手ブラなんかじゃあ、
俺を誘惑なんてできっこないぜ？

言いつつ、俺は欠伸をしてみせた。



つ、てめえ…調子に
乗ってんじゃねえぞ…!!

調子になんて乗ってねえよ。
それ以前の話だね。
ま、奥さんの本気つてのは
その程度つてのはよくわかったわ

くそっ…!!

見てみるよ。
ピクリとも勃たねえ

薄ら笑いを浮かべ、
俺はスポンのチャックに
手をかける。



ざっけんな！
なら、これはどうだ！
こ、これなら文句ないだろ…っ！

半ばやけくそ気味に
ブラを脱ぎ捨ててる由紀奈。

はち切れんばかりのたわわな胸…
小麦色の肌にピンク色の乳首。
クフフ…思ってた通り、
うまそうな体してやがる。

いいねえ、奥さん。
そこなくっちゃ
つまんねえかな

ぬき



意外と、いい体してるじゃねえか。
おかげでこっちも！
ちよつとは興奮してきたぜ

ズボンのチャックを下ろし、
半勃起になったチンポを
取り出して見せると、

へへ…勃起してんじゃねえか。
ざまあみろ

俺が興奮した様子を見て
ほっとしたのか
チンポをまじまじと見つめながら
満足そうな笑顔を見せる由紀奈。



おいおい。
こっちは半勃ちすらしてねえよ。
それとも何？
ポークビッツ並みのチンポしか
お目にかかったことがないとか？

そ、そんなことは…！

だって、奥さん経験なさげだし

う、うるさい！
てめえ、あたしのこと
馬鹿にしやがって、
今からたっぷり
後悔させてやるっ…！

由紀奈は俺の手を引き…



全裸で俺を押し倒し、
上に跨る由紀奈。
興奮した呼吸に合わせて
ゆれる大きな胸……
なかなか悪くない眺めだぜ。

余裕こいていられるのも
今のうちだ。
ほらっ、ヨガってみるよっ…



言うなり、俺のチンポに
股間を擦りつけ、
腰を前後に動かし始める。

これっ…どうよ…
たまんねえだろ？
もう入れたくなつて
きたんじゃねえの？

ズリユツ、ズリユツ
チンポとマンコが擦れ合い、
半勃ちだったモノが
徐々に堅くなる。

ユッ
サ

ユッ
サ



てめえ、反応して
きやがったな

体を前後に揺すりながら、
勝ち誇ったような表情で
俺を見下ろす由紀奈。

おらっ…
どうなんだよっ…！
良すぎて声も
出ないってか？

ククク…
確かに良い眺めだがなあ。
まだまだ俺は入りたいって
ほどじゃないぜ？
奥さんの方が
余裕なさそうじゃないか

すり
すり

なっ、んだと…
この野郎…!!
スカしてられんのも
今だけだからな

ズリユツ、ズリユツ

ほらっ…
これでどうだ!

挑発にまんまと
乗ってきた由紀奈が、
さっきよりも激しく
腰を振り始める。

おら、どうなんだよ!
いいんだろ?
負けを認めるなら
今のうちだぞっ

ククク…
ばかめ。この女、
強がつてはいるが、
そろそろ頃合いだ。

ズン
ズン

クチゅッ、クチゅッ

ふっっ、んっっあっん

ついさっきまで
余裕たっぷりに俺を
見下ろしていた由紀奈の
顔から笑みが消え、
代わりに小さな
喘ぎ声が漏れ始めた。

あッ♡

んっっ……

本人は必死で堪えているようだが、
ピンク色の乳首はピンと勃起し、
チンポと擦れ合うマンコからも
厭らしい水音が
グチュグチュと聞こえてくる。

クチゅッ
クチゅッ
クチゅッ

ククッ、汗に反応して、
媚薬香水の効き目が出始めたな…
さて、ここからもうひと押しか。

くっ、ん…。
おらっ、どう、だよ…
もうそろそろ入れたくて、
たまんねーんじゃねえの？

やれやれ、
物欲しそうな顔して、
よくそこまで強がつて
いられるものだな。

だいぶいい感じに
なってきたが…
まだまだだな。
奥さん、そんなものか？

なっ、馬鹿にしやがつて…
くそっ、まだまだだ！



そう言っで由紀奈は
さらに激しく動き始める。

んうっ、んんっ、はあっ。
ほらっ、なんとか、
言っでみるよっ!!
もうビンビンじゃねえかよ

ククッ、悪くないねえ…
でもまだ足りねえな。
ほら、もつと煽ってみろよ。
俺に『やりたい』って
言わせたいんだろ?

くっ…そ。んうっ
ああっ、あっんっ…

俺を煽るために
由紀奈が腰を激しく
前後させる度、
ぷつくりと膨らんだ
クリトリスが勃起した
チンポと擦れる。

グッ
グッ

あつあつあつ...!!
やばっ、気持ち...良い...!!

ククク...本格的に媚薬香水が
効いてきたようだな。

何これっ...マジで...
おかしくなるっ...!!

すっかり昂ぶった体を
持て余すように
由紀奈は快感を求めて
腰をくねらせる。

ククッ...
どうしたんだ奥さん。
まるでオナニーしてる
みたいじゃねえか

やっあつ、ふっん...!!
ちがつ、そんなわけ、
ねえだろ...んっ



否定しつつも、由紀奈はクリトリスを
チンポに擦りつけるのをやめない。
淫猥な表情でひたすら快感を貪る姿は、
さしずめサカった猿のようだ。

そんなに苦しそうな顔をして、
奥さんのほうが先に入れたく
なっちゃまったんじゃないのか？
ん？

ざっ…けんな…
そんなワケ、ねーだろっ…

ククッ。これでもそうやって
強がっていられるかな！？

ガチガチになったモノを思い切り
突き上げ、由紀奈の股間に擦り付ける。



んああっ！
はっ、ああんっ！

突然襲いかかる
大きな快感の波に、
由紀奈が大きく喘いだ。

ククッ、イイ声で
鳴くじゃねえか。
奥さんも本当はもう、
俺のチンポが欲しくて
たまんねえんだろ？

レレレ

あっ、ああっ！
ハアッ！
そんなっ、こと…
ああっん！

ずんずんと下から腰を
揺らしてやる度、
由紀奈の爆乳が大きく揺れ、

グチュグチュ

擦れ合う股間からは
グチュグチュと
厭らしい音が響く。

ほら、わかるだろ？ 奥さん。
俺もそろそろ限界だ！
お互い入れたくなつたつてことにして、
そろそろ楽しもうぜ？

甘い誘いに、由紀奈の瞳に二瞬、
期待の色が浮かぶが！

でも、ハアッ、ハアッ！
勝負の決着が、まだ！んんっ

だから今回は
引き分けてことにして、
早く楽しもうぜ。な？

んくっ…それなら、
仕方ねーな…

クククッ。ちよるいもんだ。
負けず嫌いの奥さんを
誘導するのなんて、ワケないぜ…

淫らな期待で頭がパンパンの
由紀奈を四つん這いにさせると、
背後に回り込む。



オナニーで
たっぷりほぐされた
由紀奈のマンコは、
既にピンヨピンヨだ。
そこに勃起した
チンポを擦りつけ、
更に由紀奈を
焦らしてやる。

なんだこれ…
もうビショビショの
ヌルヌルじゃねえか。
ククク…厭らしい
体してるねえ

んっ、ふ…っ！
あっあっ…ん。
この野郎…意地悪
しないで、あっ、
早く…しろよ…っ！

喘ぎながらも、
由紀奈は恨めしそうな
視線を向けてくる。



俺は入りたいって
言っただけど、
奥さんはまだ
言ってないだろ？
引き分けなんだから、
そこはフェアに
いかないとなあ

えっ、わ、
わかったよ！
あたしも、
い、入りたい！

何を入れたいって？
そこまで言われないと、
わからんねえ。
ククク！



ヒクヒクと震える
膣口にチンポを
擦りつけると、
今すぐにでも
飲み込みたいと
言わんばかりに
愛液が溢れ出す。

あつ！あああつ！ダメッ、
もう我慢できないいいい！
入れてっ、あんたのチンポ、
入れてよおつ！





しとどに濡れた
由紀奈のマンコが、
勃起した俺のモノを
ぐぶりぐぶりと
飲み込んだ。

あつ、あああああつ！
そんなつ、いきなり
奥までええええつ

ああっ！ああんっ！
そっ、それはっ…
んんっ…だつてえ…

ぬるる…

クククッ、
そんなこと言つて、
マンコは俺のチンポが
嬉しいつて
キュンキュン
締め付けてるぜ？



だつて、なんだい？
どうやら下の口の方が
正直みたいだな。
ちやあんと言えないなら、
やめてもいいんだぜ？
奥さん

そつ、そんなあ……！！

ほら、どうなんだよ。
俺のチンポが
気持ち良いのか？ 奥さん



きつ、気持ちいいに
決まってるだろ...
ずつと欲しかったん
だからっ...あんっ

ぎゅっ

ぬ、ふ...
ぎゅう。

ふ

ククツ、最初からそうやって
素直にしておけばいいんだよ。
じゃあ、奥さんも待ちきれない
みたいだし、動くぜ



ビビビビビビ
ビビビビビビ
ビビビビビビ

ズッ
ズッ
ズッ

ゼッ
クッ

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ

ひいあああああ！
はあん！
ああっ！ああっ！
すごっ、すごいっ！
ああんっ！
いいっ、いいっ、
気持ちいいいいっ

奥さんの中、
すっげえ締め付けた。
俺も気持ちいいぜ！
さっきからこれが
欲しかったんだろ？



ひぎいい！
ああん！ ああんっ！
そうっ、そうなのお！
欲しかったのお！



いいぜ、その反応…
そそるねえ。
じゃあお望み通り、
もつと奥まで
ぶち込んでやるよっ

はちゅっはちゅっはちゅっ

いいぜ... マンコがねつとりと絡みついてくるっ

いっっっ！あぁっ！すごいつ、奥までっ、あぁんっ！奥までチンポが届いてるううっ！

はちゅっはちゅっはちゅっ

いいぜ... マンコがねつとりと絡みついてくるっ

いっっっ！あぁっ！すごいつ、奥までっ、あぁんっ！奥までチンポが届いてるううっ！

はちゅっはちゅっはちゅっ

はちゅっ

いいぜ... マンコがねつとりと絡みついてくるっ

いっっっ！あぁっ！すごいつ、奥までっ、あぁんっ！奥までチンポが届いてるううっ！





由紀奈の体が
弓なりに反り、
びくんびくんと
大きく痙攣する。

ハアッ、ハアッ…
なに、これ…

絶頂を迎え、
由紀奈はぐつたりと
ベッドに倒れ込む。
最初の強気な態度は
どこへやら、
だらしなく涎を
垂らすトロ顔は、
浅ましい雌豚
そのものだ。

だが…
まだこんなものじゃあない。
俺は、余分に持ってきていた
媚薬ローションをたつぷりと
指先にまで纏わせた。





奥さん、
ココも好きだろ？
ちゃんと素直に
なれた奥さんに、
ご褒美だよっ

まっ、待ってえっ！
今あたし、
イッたばっかでえええっ！
あああっ！あああっ！
らめっ！らめええ！

コリコリに勃起した
クリトリスに
ローションをねっとり
塗りたくると、
俺の指の動きに合わせて
由紀奈の体が
ビクンビクンと震える。

んやああっ！
なに、なににいい！？



くっ…いいぜえ、奥さん。
よく締め付けてきやがるっ

ローションでぬるぬるになった
クリトリスをぐいと押してやると、
由紀奈が歓喜の悲鳴を上げ、
その度に繋がったままのチンポを
ギユウギユウと締め付ける。

イひいつ、
いああアああアッ！
そこっ、そこダメええっ！
んひっ、んああああっ

ギョウウウー

ビュッ

びん

うん

パンパンパンパン！

あああああつ！
ああんつ！
うあつ、あつ！
すごつ、すごいつ

やあああああつ！
奥つ！！奥までつ、
チンポがつ、
届いてつ！！
あつ、ああつ、
あつああん！



ピストンを続けながらも、
クリを弄ぶ手の動きも
緩めない。

グチュツ、
グチュツ、
グチュツ

やっあああ！
待って！ あっああ！
クリもナカもっ、
そんなにつ、 ああん！
されたら…
あああつ、 んひつ！
ふあつ！ おかしく
なっちゃううう！





いいぜ...じゃあ今度は
一緒にイこうや、奥さんっ

ひぎいい！んあああつ！
らめつ、らめえええ！
またイクッ、
イッちやうからああ！

パンパンパンパン！

パンパンパンパンッ！

ぎゅぎゅ

パンパンパンパンッ！
パンパンパンパンッ！
パンパンパンパンッ！
パンパンパンパンッ！

うっ、あああつ、いいっ！
すごつ、すごいっ！
チンポがつ、腹までっ、ああっ！
当たってるううっ！
無理っ、もう無理っ！
壊れちゃうううう！
あああ！



パンパンパンパン！

あーっ
あーっ
あーっ
あーっ
あーっ

ひあああああつ！あああつ！
ぎもちいいつ！ぎもちいいよお！
イぐっ、イッぢやううつ、あああつ
あつあつあつあああーっ！





ビュクビュク、
ゴウゴウーッ



あああひいひいひいひいっ！
ああつ、まだつぎもぢいひいひいっ、
止まらないのおお！あはあつ！
ひいつ、はあつ、ああっん…



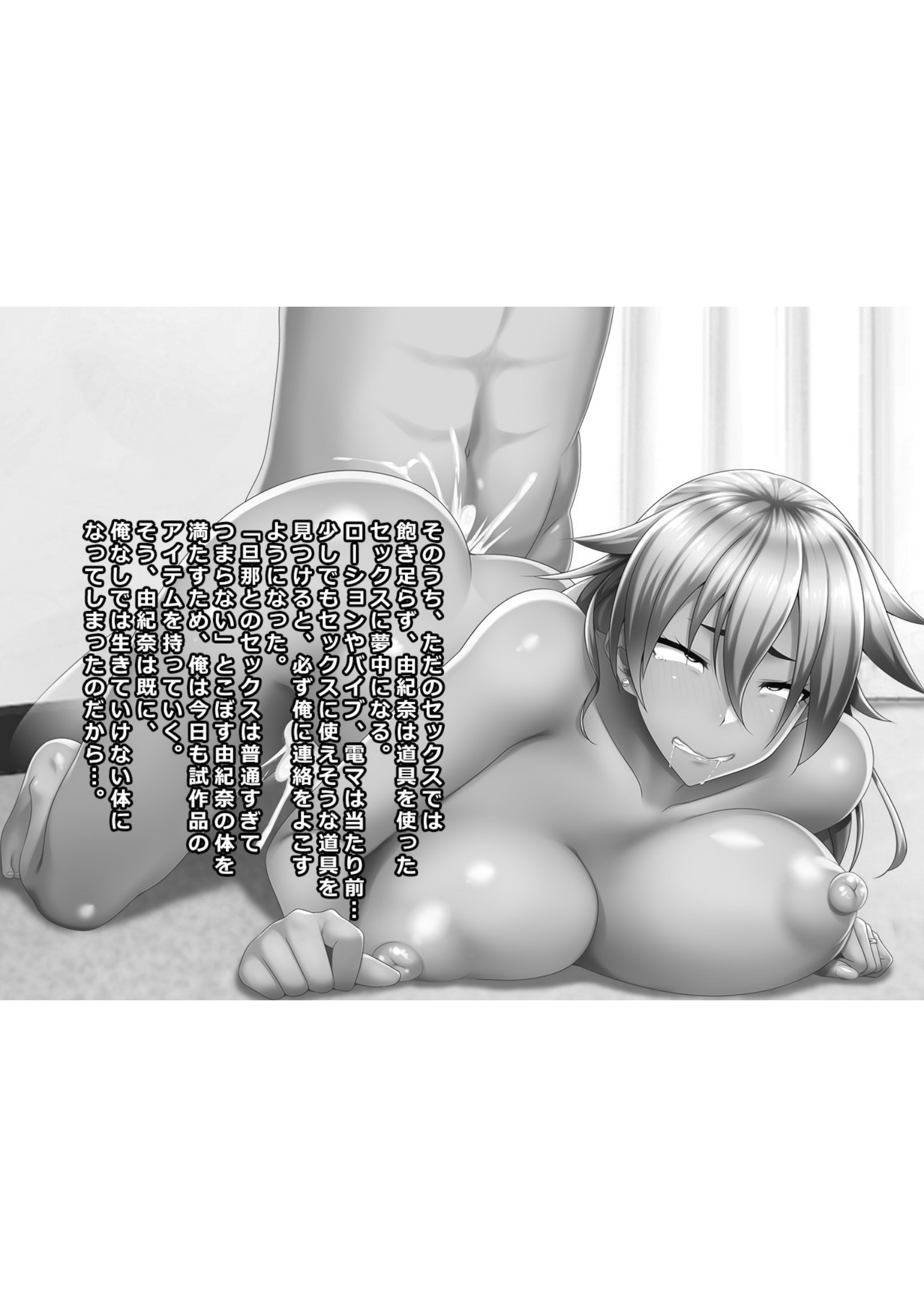


ずぷりとチンポを引き抜くと、
接合部からどろりと白濁液が
流れ出す。
由紀奈が恍惚とした表情を
浮かべながら、それを舐め取る。

へへへっ！！
こんなセックス知っちゃったら、
もうアンタ以外じゃイケねえよ！！



性の本当の悦びを知らなかった
由紀奈は、俺とのセックスで
至高の快楽を知った。
この日を境に、
性の奴隷となった由紀奈とは
幾度となく体を重ねることになる。
由紀奈のセックスに対する
関心は凄まじく、旦那の留守を狙っては
いくつもの場所や体位を愉しんだ。



そのうち、ただのセックスでは
飽き足らず、由紀奈は道具を使った
セックスに夢中になる。
ローションやバイブ、電マは当たり前…
少しでもセックスに使えるような道具を
見つけると、必ず俺に連絡をよこす
ようになった。
「旦那とのセックスは普通すぎて
つまらない」とこぼす由紀奈の体を
満たすため、俺は今日も試作品の
アイテムを持つていく。
そう、由紀奈は既に、
俺なしでは生きていけない体にな
ってしまっただから…。

























































































































